



アイヌ民族と温泉

本田 優子¹⁾

The Ainu People and Hot Spring

Yuko HONDA¹⁾

要 旨

登別は、アイヌ語のヌプルペツ *nupur-pet* を語源とする。ヌプルは霊力が強いこと、ペツは川を意味しており、アイヌ民族は温泉の効能を「霊力」と捉えたのであろう。登別の地名は 1800 年頃から登場しており、「眼病, 湿疹ニよし」とある。19 世紀半ばの文献では、湯治人の滞留が確認できる他、温泉に近接してアイヌの信仰の場が設けられていたことが記録されている。

アイヌの世界観において、すべての存在は精神性を有し、神々の中では火の神や水の神は非常に高位のカムイである。このような神々に比して「温泉の神」の存在は一般的にはあまり知られていないが、道内の数ヶ所では確認されており、たとえば阿寒では湯治を始める前に「温泉の神様、私を助けてください」と声をかけて挨拶したという。

アイヌ文化における温泉利用の代表的事例として、アットウシ（樹皮衣）製作がある。アットウシはアイヌの衣服文化を象徴するものといえるが、江戸時代には交易品として大量に移出され、本州の日本海沿岸地域でも広く着用されていた。また、明治以降もしばらくは年間 1 万反を超えるアットウシが商品として販売されており、本州からの数多くの漁業労働者が着用していた。樹皮衣製作においては、外皮を剥いだ後、木灰を入れて煮ることが多いが、白くて柔らかい繊維に加工する最上の方法が温泉に浸けることだとされる。

キーワード：温泉, 登別, アイヌ, 温泉の神, 樹皮衣

1. はじめに

近年、アイヌ文化についての関心が高まっているように感じる。たとえば環境への負荷を最小限に抑え持続可能な資源利用を可能にするために、先住民族社会に伝承されてきた民俗知を再評価しようとする志向性が、様々な学問領域において認められる。おそらくそのような流れの中で今回、アイヌ文化における温泉の位置づけについて報告する機会を与えられたものと思う。しかし報告者

¹⁾ 札幌大学副学長 〒062-8520 北海道札幌市豊平区西岡 3 条 7 丁目 3-1. ¹⁾ Sapporo University, vice president, 3-1, Nishioka 3-7, Toyohira-ku, Sapporo, Hokkaido 062-8520, Japan. E-mail y-honda@sapporo-u.ac.jp, TEL 011-852-1181.

はこれまでアイヌ文化を学ぶ中で、とりたてて温泉に注目してきたわけではなく、今回、期待されたような内容の発表ができないことを大変申し訳なく思っている。

2. 登別温泉について

最初に、今回の会場となっている登別について簡単に紹介する。

登別は、アイヌ語のヌプルベツ *nupur-pet* を語源とする。ヌプルは「濁った」と訳されることが多いが、単なる濁りを指すヌプキ *nupki* とは区別され、霊力が強いことを意味している。温泉の効能を「霊力」と捉えたのであろう。

登別の地名が記録に登場するのは1800年頃からとされており、「至而熱湯〔中略〕川の中に浴す。眼病、湿疹ニよし」とある（『東行漫筆』1809）。松浦武四郎の記録には、「虎杖を編て壁に換、篋を覆て屋根を葺、木の皮を床として仮屋を作り、是に則湯治人皆滞留す。纔に隔てシヤサンを結て猛獣の枯骨を刺し、此処より小流川を渡りて湯治所ニ至る」（『初航蝦夷日誌』1845）とあり、湯治人の滞留が確認できる。「シヤサン」はヌササン（祭壇）を指すと考えられる。近接してアイヌの信仰の場が設けられていたことが伺え、興味深い。

1858年には、ホロベツ場所の請負人であった岡田半兵衛が、硫黄生産場の作業員の湯治場として小屋を開いた。また同年、夫婦共々皮膚病を患っていた滝本金蔵がこの地で湯治して回復したことから、湯沢神社を創建した。金蔵は1888年には旅館を建設し、登別温泉の祖といわれるようになった。

3. アイヌ文化における温泉

3.1 アイヌの世界観と温泉

アイヌの人びとにとっての温泉の位置づけを考える前に、まずアイヌ民族の世界観について概観しておきたい。アイヌの伝統的コスモロジー（宇宙観）においては、この世界はアイヌモシリ（人間の世界）、ポクナモシリ（下の世界＝先祖の世界）、カムイモシリ（神々の世界）、および悪者が追い落とされるというテイネポクナモシリ（湿った下の世界）から成るとされる（アイヌ語名称には様々なバリエーションがある）。

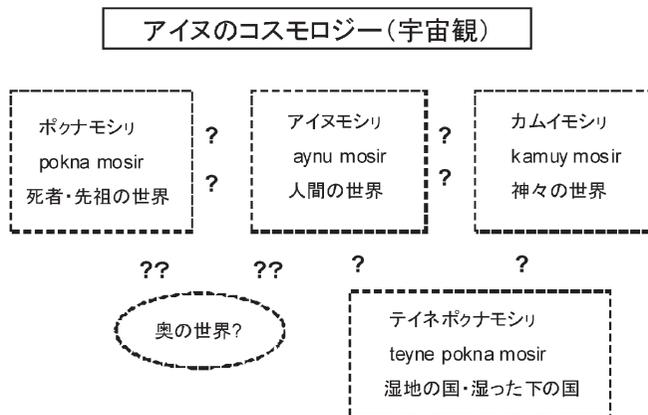


図 1 アイヌのコスモロジー（宇宙観）

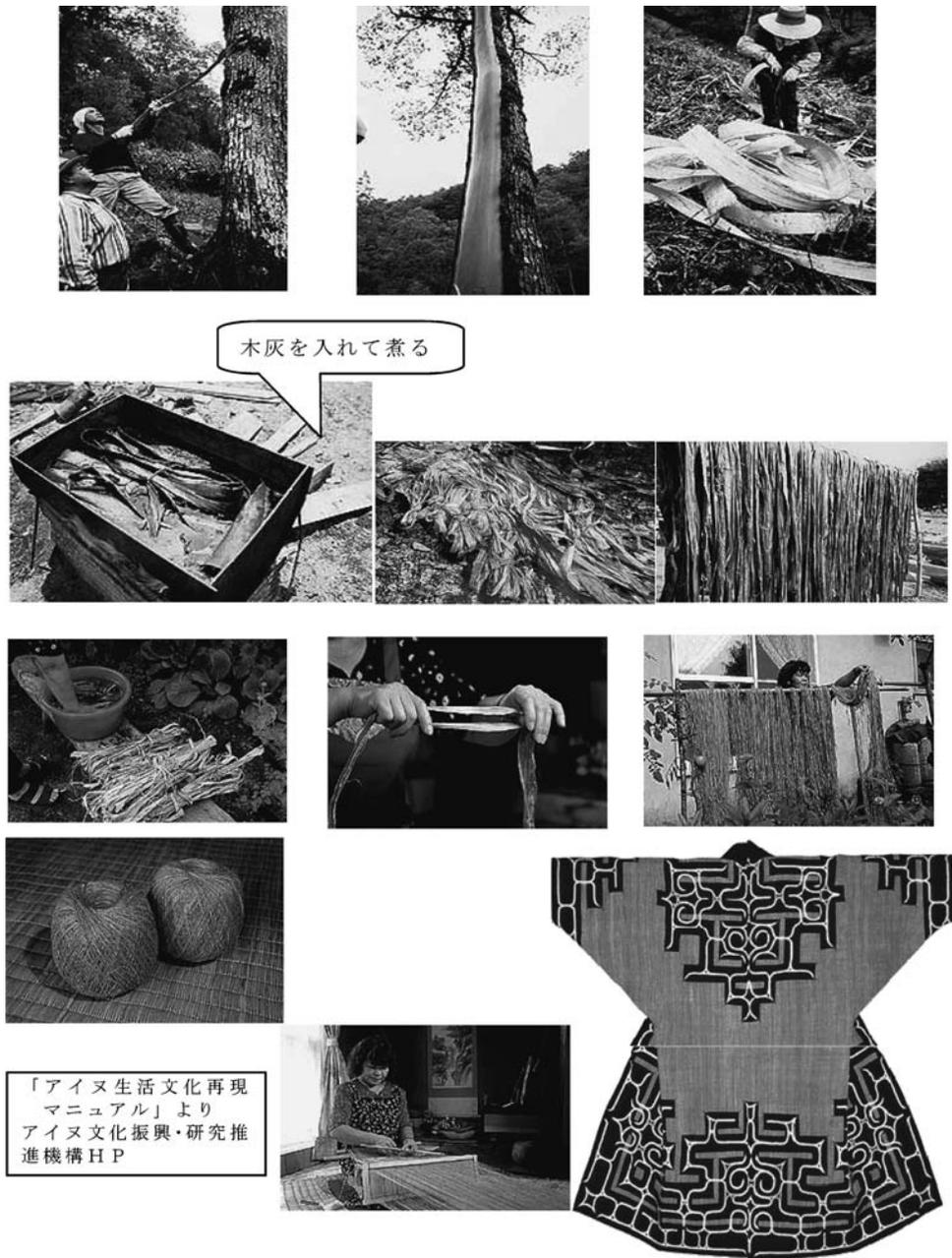


図2 アットウシ（樹皮衣）の製作

その中でもアイヌ（人間）とカムイ（神）との互惠関係が、世界の基本を成すと言われる。ここでいうカムイ（神）とは唯一絶対の存在を意味するものではない。アイヌの世界観では、すべてのものが精神性を有し、その中でも力の強いものをカムイと呼ぶ。したがって有用性の高い動物や植物はもちろん、雷や疫病神などもカムイとみなされた。このような世界観をよく示すものとして

「ヤク サクノ カント オロワ アランケツ シネツ カ イサム（役割無く天から下ろされたものは一つもない）」という言葉がある。

人びとにとって、とりわけ重要なカムイはアペフチカムイ（火の神）という女神であり、あらゆる儀式はすべて火の神への祈りから始まる。それ以外のカムイの中では、ワッカウシカムイ（水の神）が非常に高位のカムイである。水の神への不敬は厳しく戒められ、禁忌も多い。

このような神々に比して、「温泉の神」の存在は一般的にはあまり知られていない。しかし、いくつかの地域では記録が残されている。千歳ではユコロカムイ、道東の屈斜路ではヌコロカムイ、阿寒ではセセッカコロカムイと呼ぶとされ、たとえば阿寒では湯治を始める前に「セセッカコロカムイ エンキツヌイケシ（温泉の神様、私を助けてください）」と声をかけて挨拶したという【注】。

3.2 樹皮衣製作における利用

この他、アイヌ文化における温泉利用の代表的事例として、アットウシ（樹皮衣）製作がある。アットウシは民族的アイデンティティにも深く関わる衣服であり、アイヌの衣服文化を象徴するものといえる。江戸時代には交易品として大量に移出され、本州の日本海沿岸地域でも広く着用されていた。また、近代初頭には北海道全体で年間1万反を超えるアットウシが商品として販売されており、本州から流入した数多くの漁業労働者が着用していた。

樹皮衣製作においては、外皮を剥いだ後、現在は木灰を入れて煮ることが多いが、白くて柔らかい繊維に加工する最上の方法が温泉に浸けることだとされる。そのため、江戸時代の文献からは、かなり遠方の温泉まで樹皮を運んでいた状況が読み取れる。

アイヌ文化において重要な位置を占めるアットウシの製作過程に、温泉が深く関わってきたという点は注目に値する。

4. アイヌ文化の現状

以上のようなアイヌの伝統的世界観や習俗は、特に明治以降の日本政府の政策によって大きく変容してきた。現在、アイヌ語を日常語として生活しているアイヌは一人もいない。もっとも、これはアイヌ語の話者数がゼロだということではない。まだ自分の意思をアイヌ語で伝えることのできるアイヌはかろうじて存在するが、日常会話が成立するためには同じ家の中にアイヌ語のネイティブ・スピーカーが二人以上存在しなければならない。もはや、そのような家庭はどこにもない。

アイヌの子どもたちは、自らの言語、歴史、そしてアイヌの社会において決定的に重要な役割を果たしてきた口承文芸等も全く教えられる機会が与えられないまま、アイヌとして生きていくことを強いられている。また、主として経済的な要因により、大学進学率は北海道全体の半分以下にとどまっている。そのような若い若者たちに奨学金を給付して大学進学を拓くとともに、民族文化を学ぶ場を提供するという目的で、報告者の所属する札幌大学では、2010年にウレシパ・プロジェクトを導入した。ウレシパとは「育て合う」という意味のアイヌ語である。

アイヌの伝統的世界観や習俗への関心にとどまることなく、現代を生きるアイヌ民族に対する国民理解の深まりを期待したい。

【注】

発表の段階では、「温泉の神」について十分に調べるができなかったが、その後、カムイノミ（神への祈り）に造詣の深い北原次郎太氏（北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授）から、これらの記録についてご教示いただいた。